
私と君がいる世界

あまの。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私と君がいる世界

【Nコード】

N7613Z

【作者名】

あまの。

【あらすじ】

クリスマス小説です。実は学校の課題で全編英語で書きました。こちらは日本語版リミックス、という感じです。

とある思い込みの激しい、想像力豊かな女の子のクリスマス。

素直クール成分を含んでおります。

到着。沈夢。暗雲。（前書き）

短編なのでさくさくと。

三十分でしあがるかなあ。

プレゼントをくださるノリで誤字脱字などを指摘していただけると嬉しいです。

到着。沈夢。暗雲。

古今東西、年末は特別な人と過ごすものだ。

特にクリスマスはその中で一番大きいものだろう。言うまでもなく、ご存じ某世界的な清涼飲料会社のカラーリングの服をまとったご老体が、街中、いや世界中に溢れる日だ。

電車から降りて改札を抜けた私の視界には期待を裏切らず、緑と赤だけでない様々な色が目に入った。

月並みだが私は今日、クリスマスは彼氏とデートだ。ただいま四時半。待ち合わせは5時。

待ち合わせ場所もまた月並みだが、駅前の噴水近く。

事前に離しておいた通りの場所にスタンバイ。周りは同じように連れを待つ輩ばかりである。

……うむ、見ては爆発しろと呪詛を吐いていたさもしい生徒だった頃が懐かしい。今となっては同情さえできる。

「……フツッ」

やることも無いので、私はあらかじめ調べていた場所を思いを馳せながら（妄想ともいう）時間を潰すことにした。……やがて、にやけ顔を御することができなくなった所で十五分が経ったので、不覚ながら妄想から地球へ不時着することにした。

ああ……長針が五時を示すのが待ち遠しい。ブツたたいて進めてしまおうか。

『……いや、やめておこう。……アレはデジタルだしな』
などとウズウズしていると、五時になった。

逸る気持ちに身を任せ、しかしポーカーフェイスは崩さずに、ゆっくりとあたりを見回してみる。

……いない。

「ふむ、仕方がないな。うん。仕方がない。少しの遅れ位なら、仕方がないんだ……ああ、仕方ないともさ」
と、言い聞かせるようにつぶやいた。
そこでちょうど私の愛しい人が……

「……やっぱりこない」

……おそらく、電車が遅れているのだろう。よくあることだ。

到着。沈夢。暗雲。(後書き)

こんな奴(読み…こ)です。

嫉妬、苦難、至る仮説。

そう思っていたのだが。

10分が経ち、30分が過ぎた。

見れば周りの戦友はぞくぞくと幸せそうな顔で去っていく。思わず爆発しろと言いたくなっただが、笑顔で見送ってやることにした。

……悔しくなんて無いんだからな。

空を見ればもはや日はとっくりと暮れ、周りには葬式のような顔をしてあるいて行くバーコードたち。

祈るように見たケータイは沈黙を守る反面、私に待ち合わせから一時間半が経ったという事実を突きつけていた。

……ああ、認めよう。私はもはや正気じゃなかった。

焦っていたし、心配もし始めたさ。

止めどなく最悪の事態のイメージも頭をよぎっては消えた。

『もしも、人ごみに押されて電車に轆かれていたら？』

もしも、2トントラックに跳ねられて、彼の顔がすべて挽肉のようになっただら？

……いや、彼のことだ。驚かせる為に仮装をして……

……いや、それで補導されているかも知れない。

……どうしたらいいんだ……っ！！」

とまあ、そんな具合に心配事は止まらなかった。

ああ、いい年した女がせわしなく歩いては止まり、頭を抱えている姿はさぞ奇妙であっただろうさ。

が、

その時ふと、一つの疑念が頭をよぎった。

『そついえば最近、彼の様子は何かおかしくなかったか』

たとえば、メールの返信が真夜中だったり。

たとえば、会話中、心ここにあらずというかんじだったり…。

そうして思索の果て、友人が他の女といるのを見た、と言っていたのを思い出し……。

私の頭は一つの答えを弾きだした。

「もしか私は…飽きられたのだろうか」

嫉妬、苦難、至る仮説。(後書き)

おやおやあ？的な。

発想が突飛ですよね。

後悔、断定、結論。

後悔という言葉がある。後に悔やむとかいて、後悔だ。例に漏れず、今の私はその字の表現するところを余すところ無く、全身全霊で体現している。

あの時、いやこの間も、……そもそも、出会って直ぐの頃もそうじゃないか。

私はなんて心ないことを彼に言っていたのだろう。

ああ、穴があつたら、生コンクリートを流しこんでから飛び込み、沈み……。

そして私の軀は雑踏に踏みしめられるべきだとさえ思う。心の底からそう思う。

「冗談抜きで。……こんな事では、見捨てられて当たり前なのかも知れないな」

ああ、今、私はなぜ此处にいるのだろう。彼のいない、この場所に。

……分らない。

今、彼は私のことを笑っているのだろうか。私とは違う、他の愛する人と共に。

……いや、笑ってくれている方がまだ幸せだ。

もしも、忘れられたりしていたら……私は生きていけない。

いや、生きていく意味なんてあるのだろうか。

きっと今の彼には、私がないのだ。

彼の心のなかには、私が、どこにもいない。

彼の世界には、私が、いない。

そんな世界に、価値があるのだろうか？

「……………それでも」

それでも……………、いい。

どんなに忘れ去られても。

どんなに無意識に嫌われていて、存在すら他の何かに置き換えられていたとしても。

「……彼に会えるならば、それでいいじゃないか」

たとえ彼がだれかと結ばれて、子供を授かったとしても。

たとえ私が、醜く矮小な、とるに足らない様な老婆になっただとしても。

きっと、この世界には意味がある。

すれ違うだけでも、

同じ空間に居合わせるだけでもいい。

彼に、いつか、逢えるなら。

後悔、断定、結論。(後書き)

まどろっこしいですね。ええ。

我ながら発想が超展開な奴です。

再構築、失敗、そして。

私にとって、時計は意味を成さなかった。

もう、どれだけ時間が過ぎていても、私が待つ人は、来ないのだから。

すでに周りには誰もいない。

しかし、なんて素晴らしい世界なのだろう。

笑顔に満ちた人々の表情があちこちに溢れている。

絶え間なく流れる人々の波のあちこちから聞こえる笑い声。

活気に溢れる店、店、店。

誰もが寄り添って、生きていた。

……妬ましくはないんだ。

ただ……

ただ……。

こんな風に……。

「キミと……過ごしたかったんだよ」

初めて、誰かとふたりだけで共有するクリスマスを。

無機質なディスプレイの画面端で点滅する数字群が、もう三時間が過ぎる事を教えてくれた。

「…………ツ、」

呼吸が苦しい、胸が苦しい。

いや、…………心が痛いんだ。

「…………くそ…………ッ」

それこそ、泣いてしまいそうなくらいに。

しかし、涙がでる前に、誰かが肩を叩いた。

振り向けばそこには。

彼の目に映る、私^がいた。

再構築、失敗、そして。(後書き)

Q・わあ、改行がいっぱいあるよ！

A・ごめんなさいこんな描き方しかできないんDEATH。

再会、解答、邂逅。

どこかで読んだ小説に、こんな表現があった様に思う。

「キミの考察は、全てが間違っていることを除けば、大体はあっている」

この言葉ほど、今回の事件（私にとっては大事だ！）を表現できている言葉はそう無いだろう。

結論から言えば、問題は無かった。

否、

そもそも、問題がなかった。

アレからとつさに彼を目前にした私はすでにマジで泣き出す五秒前であったため……。

……。 …… 彼に抱きついたんだ。

まあ、それだけなら良かっただろう。

しかし私は叫びながらだった。

しかも依りにも依って、「捨てないでくれエ!!」

……。

……。 ……。 そんな目で見ないでくれ。 私は臨界目前だったんだ。

ちなみに、あれは彼曰く……しがついた、だそうだ。

周りの白い眼と言うか、好奇心と言うか、二十四の瞳も吃驚なほどの種類の目に晒されたのは書くまでもないだろう。 なんにせよ、天下の大都心の駅前である。

閑話休題。

それから私は泣きながら、彼に引き摺られるように近くのファミレスになだれ込んだ。

しばらくの間（彼曰く一時間弱ぐらいであったらしい）、彼になだめられ、泣きに泣いた私はやっと落ち着いたのだが……、我ながら驚いたが、泣き声の次に口から出たのは質問の嵐だった。……ああ、今思えば私はまだ不安だったのだろう。

彼のここ数日の奇異な行動についてを問いただし、挙句彼の親類にまで証言させ（ケータイで）……、ともかく、私の口が目を吹くのを辞めたのはとうとう九時半を過ぎた頃だった。

要するに、彼は働いていただけだったらしい。

休日は朝からバイトで働いて、夜もまた別のバイトで働いて、帰宅したのは零時すぎだったそうだ。しかし眠る前に唯一の楽しみと、私にメールを返していたのだそうだ。

日中、どうも上の空であったことが多いのは疲労からだだったらしい。そして一緒にいた女というのは、単に彼の姉だったそうだ。

普通にクリスマスのプレゼント選び、ということだったのは、彼女が証言をした。

そして、今日遅れたのは……。

単なる、寝坊であったらしい。

曰く、前日に給料を受け取ったが終電を逃したので、その足で目的の店の近くまでに行き、回転するまで待機し、店前の札がひっくり返ると同時に店に突入してプレゼントを購入、そして帰宅。これが今日のお昼だそうだ。

しかし、その後がいけなかった。

曰く、そのままぶっ倒れたまま（玄関で！）、待ち合わせを過ぎてもまだ寝ていたらしい。最終的に彼の姉が彼を悲鳴と共に発見し、蘇生させたのだとか。あわててドアを突き破る勢いで部屋へと入り、

着替え、全速力で来た、のだそうだ。（ちなみに、彼の姉が帰ってきたのは忘れものの所為だったので、ほとんど奇跡のようなものだったらしい）そうして、今に至ると。

轢かれたわけでもなければ、補導されたわけでもなかったことに関しては良かったと言わざるを得ない。

が。私は自他ともに認めて憚らない、感情に素直な性格だ。

誰であろうと嫌なことは嫌というし、意見はちゃんと伝えるのが私である。

無論、憤怒も同じである。ああ、怒ったとも。造り付けのテーブルをひっくり返すぐらいには怒っていた。

しかし、フラッシュバックというのだろうか？私がいかに不安であったかということなどを事細かに説明していたら、その感覚が蘇ってきてしまい……。想定外であったが、私はまた泣き出してしまった。今度はなかなか止まらない。自分でも吞まれてしまって、どうしようもなかった。

彼はといえば、何度も謝り続けてはなだめ、なだめては謝る、の繰り返しだったのだが、唐突に、彼が仕方ないという様子で私に向き直り、小さな箱を渡してきた。

中にはいつていたのは、シルバーの指輪だった。

しかもそれは一度、デート中に私が欲しいと言ったものだった。

私がついた行動はといえば、まず、硬直した。それから……嬉し泣きというモノを初めてした。彼としては私がまた泣きだしたので、どうしたら良いか分らないとでも言ったような様子で慌てていたが、正直、あれは小気味良かった。

なんにせよ。私は戻ることが出来た。彼のいる世界に、戻ってこれ

ただ。

それ以降はまだ開いているであろう、最後に行くはずであったレス
トランへと場所を変え、とても……大切な時間を過ごすことが出来
た。

そして今、25日になった。

長針が指すのは零だが、短い針が指すのも零。

私たちは、一緒だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7613z/>

私と君がいる世界

2011年12月25日00時45分発行